

6 本邦における神経心理学用語(「失語」など)の起源

濱 中 淑 彦

西欧の近代神経心理学は、F. J. Gallの頭蓋学的局在論(1810-19)を検証しようとしたPaul Broca(1824-81)による「構音言語の座」(今日のBroca言語領野)に関する剖検例(1861)とともに始まったことは周知の通りであるが、彼の用語“*aphémie*”にかえて大先輩のA. Trouseau(1801-69)が提案した“*aphasie*”(1864)の訳語「失語」、その他の神経心理学・失語学の邦訳語の由来にかかわる事情は意外にも知られていない(大橋「失語・失行・失認」1960、神山、他「日本失語症文献集成」1972など)。筆者の調査では、東大医学部教授(後に医学部長)を勤めた三宅 秀(1848-1938)が口述(久保美昌保筆記)した「神経系診断法及び産科学」(1878)は明治維新(1868)以後に日本人の手になる初期の神経学手引書の一つであって、

これに“*Lentor lo (q) uelae*”, “*Haesitatio lo (q) uelae*”, “*Alalia*”と鑑別される「失語 *Aphasia*」(原語はラテン語)が「言語の中枢」の概念とともに登場するのが印刷された最初の学術用語である蓋然性が高く、一八七二年以降彼がドイツ人教師(T. E. Hoffmann, A. L. A. Wernich, E. Baelz)の内科学講義で通訳を勤めた事情とも無関係ではないと思われる。森 鷗外(1862-1922)が学習ノート「語彙材料」(1882/83)に「失語 *Aphasia*」と筆記したのは三宅の講義・著書による。

その後、大阪医学校の大西 鍛の失語論(1893)に「不共同性・知覚性・健忘性失語症 *ataktische/sensorische/ amnestische Aphasie*, 不全失語 *Paraphasie*, 精神盲、精神聾・領義中枢、綴詞中枢」などの訳語が登場し、渡辺栄吉が岡山で発表した「皮質運動性失語」症例報告(1893)に続いて、E. Baelz(1849-1913)が「鼈氏内科学下巻」(1894: 竹中成憲、本堂恒次郎、馬島永徳訳)に「失忘性・失調性・意識的失語・語聾 *amnestische/ ataktische/ sensorielle Aphasie/ Worttaubheit*, 回語 *Monophasie*, 変語 *Paraphasie*, 書字不能 *Agraphie*, 読字不能 *Alexie*, 擬態

不能 Amimie, 精神盲 Apraxie, Seelenblindheit」を記載した。呉 秀三(1865-1932)の「精神医学集要上巻」(1894)には「外言語の障礙 Dysarthrie」と区別される「内界言語の障礙 Dysphasie」として「運動性失語 motorische Aphasie, 感覚性失語 sensorische Aphasie, 健忘性失語 amnestische Aphasie, 完全失語症 totale Aphasie」, 「語盲症 Wortblindheit, 語聾症 Worttaubheit」の訳語がみられるが、Leitungsaphasie, Paraphasie, Agraphie は未だ「伝達生失語、言辞倒錯症、不能書写症」であり、愛知医科大学の川原 汎(1859-1918)の「内科彙講・神経系統篇」(1897)にいたって「発言中枢、語響中枢、運動的・失調的失語、認識的失語」の他に「錯語、失書、失説」が登場し、図式・符号脱失 Asymbolie, カントの符号機能、失識 Asemie など、現代まで用いられている幾つかの重要な訳語と概念が導入され、また右利交叉性失語症例すら記載された。かくして今世紀初頭に「神経学雑誌」(1902)が創刊(三浦謹之助、呉 秀三)され、今村新吉のヴェーンにおけるイヌの脳梁切断実験 (Pfligers Archiv (100: 495-531, 1903)、浅山忠愛による日本語失語の特性論

(1912) & Deutsches Archiv für Klinische Medizin, 113: 523-529, 1914) などをもって独自の研究発展への道が準備された。

ちなみに当時のドイツ語圏ではこの間、C. Wernicke の“Der aphasische Symptomencomplex” (1874)、A. Kussmaul の“Die Sprachstörungen” (1877) などが出版されているが、Baelz も本邦の著者ども、これらの著作に直接、全面的に依拠した記述を行っているとは考えられず、“Broca”と“Wernicke”の名前も三宅「人名医語辞典」(1894)、呉(1894)にいたって初めて登場するようである。呉以外は参考文献を挙げていないが、いかなる原典を参照したかは今後更に検討が必要な課題である。

(資生会八事病院)